

私は教師。それも享年四十九歳の、いわゆる「熟年教師」だ。最近流行の言葉でいえば旧人類に属する。そんな私が「阿Q」の熱心なファンだと云うと、同僚の教員、父兄、そして教え子たちも驚愕の声をあげる。なにしろ、自分で云うのもなんだが、私はずっと「典型的な教師」を演じてきた。生真自面で融通の効かない佛頂面の、あれだ。だから、生徒にもけして好かれてはいなかった。

健康に育って
もらいたいと
いう一心から
つい厳しさば
かりが表面に
でていた。

こんな私と
阿Qを出会わ
せたのは、ひ
とりの女生徒
だった。―彼
女を仮にK子
としておこう。

K子はいわゆる登校拒否の生徒だった。長い欠席が続くので、私やK子の両親が強く説得すると中学校にふらっと現れるものの、それもほんの二、三日で、翌日からまた休み続ける。その繰り返しだった。K子に登校を促すものの、彼女は表情のない視線を私に向けるばかり。反応のないK子相手にひとり語りの私は、K子の虚ろな瞳孔に吸い込まれそうだった。

去年の四月から一ヶ月は積極的に彼女の家を訪れた私も、臆月晴れの頃となる彼女の家に足を向けなくなってしまう。正直なところ、どんな指導をすれば良いのか暗中模索だった。正月の末だったか、私は学生時代から慣染みのインド民芸品を扱う店を訪れた。印度繻子のカーテンをくぐると、もう見飽きた、私以上に佛頂面の親父が茶をすすっていた。珍しく若い娘

でた。「なんだ、中学の教師をして阿Qも知らないのか」と親父。学校の仕事に忙しいと私が云うと、親父は私に茶を注ぎながら「街は歩くもんだ」。ちょうどその月が阿Qのライブだった。K子はライブの度に、阿Qにお香をプレゼントしているらしい。

「学校へ来るんだ」と私。K子は何も答えず、会場から洩れる音にあわせ揺れている。「学校へ来い」と私。するとK子は「先生も踊り

少しずつ耳が慣れると、音楽が聞こえ始めた。そして私の身体は勝手に揺れ始めた。おもしろいように身体が動く。踊れたのだ。昨日までの私とは違う。K子と視線があう。「グーだね、阿Qは」と私。K子は「踊れるじゃん」と云いつつ私が高く掲げている手を指して大笑いしている。私は、興奮のあまり白墨で阿Qにアッピールしていたのだ。私はこの日まで、ロック

阿Q

東京シヨウ

四月二十四日渋谷TAKOFF7

相手。私は親父をひやかして、その娘の顔をうかがった。K子だった。私も驚いたが、彼女の狼狽はそれ以上の様子。私が声をかける間もなく走り去ってしまった。

がこの先ずっと有り得ない気がした。阿Qのライブ会場へと向かった。古びたガレージを改造した建物（ロフトという）が会場だったが、この街に住んでいて私はこんなところを初めて目にした。勇気をもって会場に足を踏み入れた。想像を絶する大きな音。耳に悪い。それなのに若者たちは曲ともいぬ豪音にあわせて両手を宙に浮かせ器用に腰を揺らしながら踊

なよ」と笑った。私は「先生が踊れるか」と声をあげた。私はそれまでダンスのダの字も知らなかった。「踊れないんじゃないよ」とK子。K子は続けて「踊れない人なんていない。ただ自分に鍵かけてるから踊れないんだよ。鍵、あけて、楽になろうよ」。K子は嫌がる私を無理矢理会場に連れ戻した。

私に話しかけてくるようになった。教室も明るい。校長や教頭は、これまで彼らに従属するばかりだった私が「踊る数学」の授業を始めたことに批判的だ。昼休みの屋上でのダンスも、私の長髪とパンタロンも職員会議で槍玉にあがった。しかし私はそれを苦とはしない。私は、学校という組織のために在るのではない、K子たちのために在るのだから。（鈴木秀雄・教員）

は若者を非行に走らせると信じていた。しかし、今は違う。阿Qが私を自由にしてくれた。翌日、K子は学校に現れた。次の日も次の日も。もうK子は大丈夫だった。生徒は少しずつ